様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：２７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００３２３

研究課題名（和文）臼杵市加島家資料の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of the Kashima Family Materials in Usuki City

研究代表者
鈴木　元（Suzuki, Hajime）

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：４０３０５８３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　加島家より臼杵市に寄贈された、江戸時代末期を中心とした資料群を包括的に調査し、資料の状態や伝来にかかわる情報を目録化し公開した。資料の核をなすのは、加島英国の著述、彼が残した蔵書、遺物である。彼は多彩な趣味と活動を見せた人であった。何より、江戸時代後期の臼杵の歴史や地理、風習にわたる雑多な情報を記録したその著述は、なお今後の活用や解明が期待される。
　そうした資料のうち、今回新たに、江戸時代末頃における臼杵・長崎間の旅の記録（『長崎道中日記』）、俳諧宗匠との交流を明かす書簡を紹介した。臼杵の地誌『臼杵博識誌』も興味深い資料であり、これも追って紹介予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、江戸末期の臼杵という一地方に生きた文化人、加島英国という人物を、書物と遺物から浮かび上がらせようという試みであった。英国の名と業績は、一部の郷土史家にのみ知られていたものといってよいが、今回、彼の子孫からの寄贈品の目録を完成させることで、改めて英国という人物の活動の総体を見渡す契機とすることができた。
　また最終年度の調査からは、英国による地誌編纂とその伝来にかかわる新たな知見が得られた。今後、詳しく紹介する予定であるが、地方に蓄積された知の継承という問題を考えるうえでも、英国の事例は貴重なモデルを提供する。それは、19世紀末における近代の知の形成ということとも関係していく。

研究成果の概要（英文）：　The Kashima family donated a group of materials mainly from the late Edo period to Usuki City, and we have conducted a comprehensive survey, catalogued and published information on the condition of the materials and their transmission to the city. The core of the materials are the writings of Kashima Hidekuni, the collection of books and artifacts he left behind. Kashima was a man of varied interests and activities. Above all, his writings, which record miscellaneous information on the history, geography, and customs of Usuki in the late Edo period, are expected to be utilized and clarified in the future.
　Among these materials, we have newly introduced a record of a trip between Usuki and Nagasaki at the end of the Edo period ("Nagasaki Dochu Nikki") and a letter that reveals an exchange with a haikai master. A geographical journal of Usuki, "Usuki Hakushikishi" is also an interesting material, which will be introduced later.

研究分野：日本古典文学

キーワード：加島英国　長崎道中日記　升六　臼杵博識誌

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

江戸時代の臼杵において様々な著述を残し活躍した加島英国という人物は、『臼杵史談』等の論文により、郷土史家の間では一定知られていた存在であった。その加島英国の著述を中心とした加島家資料が、加島家よりかつての臼杵図書館に寄贈されていた。それらの寄贈資料は、上記の一部郷土史家の間では知られ、紹介されたものもあるが、寄贈資料の全体像を伝える報告はなく、目録も覚書程度のものしか存在しなかった。

本研究は、事前に瞥見した加島家資料中に、英国の陰陽師としての活動を窺わせる資料が見出されたことから、江戸時代の陰陽師の活動を知る手掛かりが得られるのではないかと考え、陰陽師の文学活動というテーマに新たな知見が得られるのではないかと考え、その前提として寄贈品目録を整備することに着手した。

２．研究の目的

「背景」に記したように、究極的には近世陰陽師の文芸活動について新たな視点を学界にもたらすことであったが、「研究成果」でふれるように、この方面では期待できる成果は望めないことが判明し、まずは寄贈品目録を完成させることで、加島英国の多面的な活動の全体像を浮かび上がらせることを目的とした。

３．研究の方法

研究の方法としては、寄贈品の大半が文書・典籍であることから、書誌学的調査が中心となり、続いて個々の資料の文献学的研究に及ぶこととなった。しかし、それぞれの過程において、新たな事実が判明したため、次のような流れとなった。

① カードによる書誌データの採取。
② エクセルによる目録化。
③ 臼杵図書館での寄贈受入目録との照合。また、図書館保管時代に作成された「加島資料目録」との照合。
④ 文化財管理センター職員からの伝来に関する聞き取り。
⑤ 重要資料の分析と翻刻紹介。

加島家資料形成の中心人物、加島英国の著作として特に注目すべきものとして、大坂の俳諧師升六からの一連の書簡、臼杵から長崎への往復の道中日記の二点を選定し、前者を研究協力者の湯谷祐三氏、後者を徳岡涼氏に委ね、翻刻紹介を行った。

⑥ 臼杵市保管資料外の調査。

もう一点、加島家資料には含まれていなかったため、研究の着手が遅れたものとして、加島英国編の地誌があり、これについては研究代表者鈴木が現在調査中。加島英国の活動の多面性はこれらのみでは覆いきれないが、まったく傾向、方向性の異なる三方面から幕末の臼杵に生きた地方文化人の活躍を照射しようと試みた。

４．研究成果

調査の過程において陰陽師としての加島英国の活動は余技的なものでしかなく、寄贈された蔵書の中にも一定量の「易」関係書は見出されたものの、陰陽師としての活動を窺わせる資料は見出されなかった。そのため、この方面での成果は期待を満たすものではなかった。

ただし、加島家からの寄贈資料とされるものを悉皆調査することにより、いくつかの知見と問題点を見出すに至った。まず、問題点だが、以下のような諸点を挙げることができる。

① 当初、臼杵図書館において保存管理されていた時代の管理上の混乱から、加島家からの寄贈資料が、明確な枠をもって区別されていたわけではないこと。具体的には、藩主家の稲葉家からの寄贈資料を中心に、市内の多くの家から寄贈された資料が土蔵のような収蔵庫に一括収蔵されていたことと、大分県史の編纂時に、県史編纂の史料として家ごとの括りから外されて別置されたことがあったこと、また図書館利用者の要望に応じ、館外への貸し出しをしていた時期もあったこと等から、多少なりとも「加島家資料」という枠組みに混乱が生じた可能性が高いということ。
② 「加島家資料」の認定にあたり、基礎資料となるのは「寄贈（受入）目録」だが、現存する目録が寄贈品の全体像を示すものとはなっていないこと。また、上記の理由により紛失したらしい加島家資料があるらしいこと。

さらには、かつて図書館において加島家資料の目録化が企図されたらしいのだが、それらの詳細

は研究報告として刊行した『臼杵市教育委員会所蔵「加島家資料」目録』に収めた「解題」に詳しく触れている。なお、同『目録』は、冊子として大学や研究機関、臼杵市と関連の深い自治体等に送付したが、熊本県立大学のリポジトリにおいても公開している。今後、加島家資料をその伝来と関わらせて論じる場合には、上記の事情を考慮する必要があり、資料性の認定にかかわる研究成果として言及しておく。

上記のごとく、資料の悉皆調査を進めると同時に、今後諸方面で活用が期待される資料の紹介を行った。一つは、加島英国『長崎道中日記』(『熊本県立大学文学部紀要』第 80～83 号）で、キリスト教禁教時代の世相を反映し、踏み絵を臼杵から長崎奉行所へ返却に出る旅の道中記録として残された資料。幕末の旅程記録としても、風俗資料としても興味深い内容である。翻刻にあたっては、研究協力者の德岡涼氏の尽力を得た。

また、加島英国の多才ぶりの一端を示す一例として、俳諧関連資料をこれも研究協力者の湯谷祐三氏の尽力により紹介できた。大坂の俳諧師、黄花庵升六の英国（吐洲）宛て書簡の翻刻と解題である（湯谷祐三「加島英国（吐洲）宛黄花庵升六書簡の翻刻と解題――都市の俳諧宗匠と地方俳人の関係――（解題篇)」熊本県立大学『国文研究』第 67 号、なお翻刻篇は上記『目録』に収録)。同解題により、地方俳人と都市の俳諧宗匠との新たな交流事実が明らかとなったが、それだけでなく、幕末の臼杵藩政下において興味深い活躍を見せる一文化人の世界観とも、あるいは精神世界の一面とでもいうものを再考させる手掛かりを示し得た。

研究期間内に具体的に紹介できたのは、上記の範囲に限られるけれども、湯谷「解題」が提示した見通しは、かつて佐野武夫氏が私家版で紹介された『桜翁雑録』やその他の未紹介資料との関わりの中でさらに検討を深めなければならない。その意味で同じく加島英国の編になる地誌『臼杵博識誌』にかかわる研究課題が最終年度に浮上したことも、成果報告としてごく簡単にふれておきたい。

臼杵市保管の一本(『臼杵博識記』)が保管上「加島家資料」として認識されてこなかったため、上記目録にも本書は漏れており、実際、これが加島家からの寄贈資料であったか、別の家からの寄贈であったかは定かでない。本研究において、「加島家資料」から「加島英国」その人へ研究の視点が移る中で、ようやく大分の先哲史料館に『臼杵博識誌』が蔵されることに気づき、改めて臼杵市蔵本に気づいたという次第である。まずは『臼杵博識誌』について、この二本をもとに文献学的な資料批判が、今後もとめられる。このことと関連し、前記『桜翁雑録』には英国による「雑録」としか呼びようのない、雑多な情報が覚書風に記録されているのだが、その中に「臼杵書籍目録」なる一項目の記載がある。これが英国の個人蔵書の記録なのか、蔵書とは関係なく臼杵関連の書目を覚書としたものか、はっきりとしないけれども、その中に「臼杵博識誌　同(加島英国著）　二冊」とあることにも注意の必要がある。一般にこうした冊数表示は「二冊本」の意味として記すものであることからすると、同書は本来二冊本として編まれた可能性が高いとみてよい。このことも、現存本の資料批判に際しては重要な手掛かりとなる。

続く課題として、『臼杵博識誌』の享受の歴史の問題がある。臼杵の地誌として広く紹介されている鶴峯戊申『臼杵小鑑』が『臼杵博識誌』を先行研究として吸収していることは、既に知られているが、これまでまとまった形で『臼杵博識誌』が研究、紹介されたことはなかったため、その影響関係の実態は知られていない。また、『臼杵小鑑』も古く昭和 14 年に久多羅木儀一郎により私家版の形で活字紹介されて以降、研究が進んでいない。久多羅木の解説にも言及があるように、『臼杵小鑑』は『小鑑』→『小鑑拾遺』→『小鑑増補』というように、増補・補訂の経過をたどって変容しているのだが、初期形態の『小鑑』は不明で『拾遺』以降の形しか判らないとされている。だが、資料の発掘が進んだ現代では、改めてこれも考え直す余地がある。『博識誌』とあわせた臼杵地誌の総合的研究が求められる。

さらに、先哲史料館本『臼杵博識誌』の調査から、近代における同書の受容の問題も見え始めたところである。その問題を解明するためには、柳田民俗学と地方の郷土史家との情報交流を視野に入れて、近代の民俗学の形成とも関連づけながら考える必要がある。それは、地誌というテキストをより大きな広がりにおいて認識し直すことにもつながるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 湯谷祐三	４．巻 ６７号
２．論文標題 加島英国（吐洲）宛黄花庵升六書簡の翻刻と解題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国文研究	６．最初と最後の頁 pp.1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 徳岡涼	４．巻 通巻第８２号
２．論文標題 紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（三）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 pp.23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 徳岡涼	４．巻 28（81）
２．論文標題 紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（二）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 pp.37-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 徳岡涼	４．巻 第27巻通巻第80号
２．論文標題 紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（一）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 pp.19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木　元	4．巻 16
2．論文標題 「うたう　― 小歌の声、俳諧連歌の場」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文彩	6．最初と最後の頁 pp1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山田尚子	4．巻 240
2．論文標題 「古代日本の吏隠と謝霊運」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 pp.80-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田尚子	4．巻 3
2．論文標題 「『太平記』と兵法書―「七書」の受容をめぐって―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 松尾葦江編『軍記物語講座第三巻　平和の世はくるか―太平記―』花鳥社	6．最初と最後の頁 pp.175-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田尚子	4．巻 8
2．論文標題 「賞罰と征伐の背景―呉越合戦譚における范蠡の諫言をめぐって―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アナホリッシュ国文学	6．最初と最後の頁 pp.45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田尚子	4．巻 117
2．論文標題 「白居易の「吏隠」・「中隠」と慶滋保胤「地亭記」」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 藝文研究	6．最初と最後の頁 pp.161-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 湯谷祐三・廣森美枝子	4．巻 55
2．論文標題 「手紙より見たる雲華上人と小石元瑞の交流」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同朋仏教	6．最初と最後の頁 pp.173-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木元	4．巻 63
2．論文標題 稽古する　―連歌の身体性をめぐる覚書	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国文研究	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木元	4．巻 62
2．論文標題 京師巡覧〈稲荷〉贅註	5．発行年 2019年
3．雑誌名 朱	6．最初と最後の頁 183-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 前田雅之編	４．発行年 2018年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 515
３．書名 画期としての室町　政事・宗教・古典学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域文化研究の部屋
http://suzukiha-lab.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山田　尚子 (Yamada Naoko)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	
研究協力者	湯谷　祐三 (Yutani Yuzo)		
研究協力者	徳岡　涼 (Tokuoka Ryo)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関